

看取り事例 (在宅①)

在宅) 状態が安定していたにもかかわらず、本人が望む場所で最期を迎えることができなかった事例

(概要)

80 歳代、女性、膵臓がん末期、多発性肝転移、一人暮らし、別居の家族が介護

(経過)

本人は昔、夫を胃がんで亡くし、化学療法のつらさをみたため受けたくないと思っていた。しかし、息子の治って欲しいという思いを受け入れ、一旦化学療法を行ってみたが、つらくなり涙ながらに中止を訴えた。痛みは麻薬（オキシコドン）の内服でコントロールができており、本人の希望に沿って自宅療養を行う方向で決まったが、家族は不安を抱えており、ケアマネジャーに退院後の生活について相談をしていた。在宅側より、病院側に退院支援担当者の介入・退院前カンファレンスの開催・在宅医の調整を依頼し、その後、退院となったが、退院後 9 日目でトイレに立ち上がれなくなったことに家族が驚き、救急車要請し、入院となった。それでも本人は自宅に帰りたいと訴え、主介護者である長女もその思いに沿いたいと思っていたが、長男夫婦との意見の食い違いがあり、退院できず緩和病棟へ転棟となった。転棟後すぐに、1泊2日で外泊をし、痛みもなく、好きなものを食べ、病院へ戻った翌日死亡された。

(本事例で達成できていること)

(本事例から見える課題)

(目指す姿の達成に必要な要素)

令和 2 年 3 月 3 1 日 (火) までに高齢福祉課にご提出ください。

提出先(担当外山) : E-mail: toyama-yoshimi@city.anjo.lg.jp または FAX 0566-74-6789